

群 教 セ	F09 - 01
	平17.231集

不登校に対する支援体制づくり

—— 「ほっとルーム」を拠点とした不登校への対応と
予防的な取組を通して ——

特別研修員 佐藤 和良（邑楽町立長柄小学校）

《 研究の概要 》

本研究では、不登校傾向の児童に対して、教職員がチームを組んで、支援の方法を探る。その中核に「ほっとルーム」を据える。また、不登校の予防として、モデルクラスにおいて、予防的・開発的な教育相談を行う。未来の自分の夢や希望をもつことは、今の自分にどんな努力が大切か考えることにつながる。自分の願望や性格など、自己理解を深めながら、未来への時間の流れの中で、今を大切に生きるプログラムを開発する。

キーワード 【教育相談 ほっとルーム 不登校対策 チーム支援 予防・開発的教育相談】

I 主題設定の理由

学校として、不登校に対してどのように対応し、不登校を出さない取組をどのように行うか、という観点で、以下、記述していく。

1 不登校へのチームでの支援体制作り

本校は児童数520名の学校である。前年度まで年間30日以上欠席した長欠児童が3名いたが、そうした不登校の児童に対して、組織的な支援は、ほとんどできていなかった。そのために、不登校児童への対応は、学級担任が単独で行うことが多く、効果的な支援が十分行えてこなかった。そうした現状を打破するために、複数の支援者が関わり、多角的な視点で不登校傾向児童への理解を深め、より適切な支援ができるようなチーム支援体制を整えていくことが必要であると考えた。

そこで、本校では、「ほっとルーム」を設置し、不登校児童への支援チームを編成することにした。また、体制を整えた後、どのような支援が有効か、その方法を研究していく必要があると考えた。

2 予防的・開発的な教育相談〔自分の未来を考え、今を大切に生きるためのプログラム作り〕

4月、6年生の自分のクラスの児童31名に「将来の夢があるか？」と聞いたところ、「ある」は14名、「ない」は17名であった。これからの人生に、今夢がないという児童が半数以上みられると

というのが実態であった。

しかし、自分の将来に展望がもてるかどうかということは、今の自分が何をしたらいいのか、何をすべきなのかといった意欲の根源にかかわることである。「何のために学校へ行くのか」「なぜ勉強するのか」自分の将来への展望がないとそうした疑問に答えられないし、目的をもって、学習に取り組むことができない。

実際、日ごろの学習への取組について、クラスの児童の実態としては、受け身的で、自主性に乏しい様子がみられる。

そこで、自己理解を深めながら、将来の自分への展望をもち、身近な目標に向かって努力するようなプログラムを工夫することにした。そうした取組によって、不登校の予防にもつながるものと考えた。

II 研究のねらい

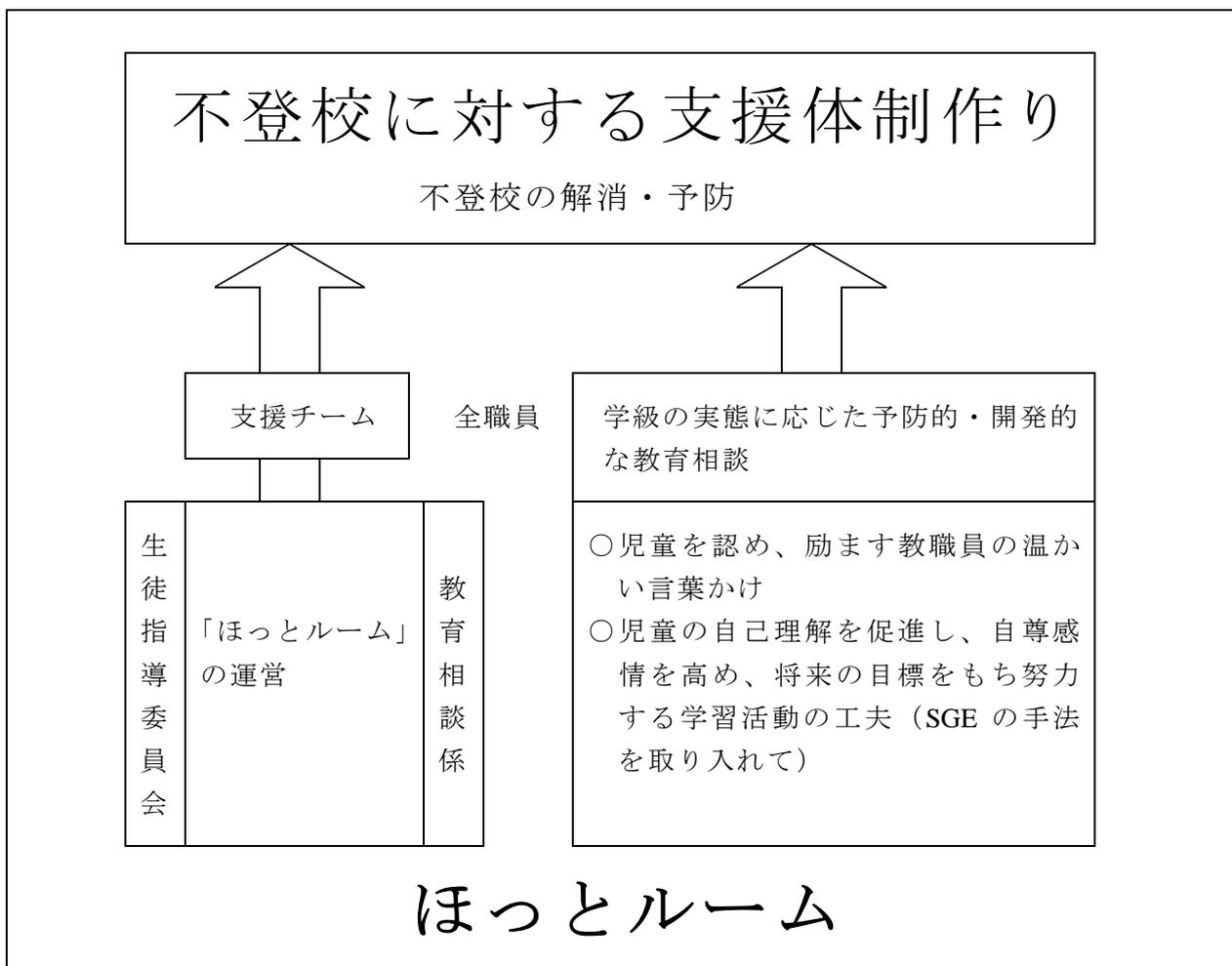
1 研究のねらい

- ① 「ほっとルーム」を核とした不登校の児童への有効なチーム支援の在り方を探る。
- ② 学級活動での予防的・開発的な教育相談の取組として、自分の未来に目標をもって努力できる児童を育成し、不登校の予防に取り組む。そのモデルプログラムを作成し、校内に広める。

2 「ほっとルーム」の基本的な考え方

本校では、「ほっとルーム」を以下のような機

図1 「ほっとルーム」の構想図



能をもたせ、活用することにした。

(1) 不登校の児童への支援

年間30日を越える欠席数の不登校の児童に対し、支援チームを作り、児童理解を多角的な視点で深め、支援方針を決め、支援を行う。

(2) 悩みの相談室

「ほっとルーム」という部屋を設置し、悩みや不安のある児童が、相談したい時に、相談したい職員と相談できるようにする。児童の精神的な安定をにつながるようにする。

(3) 予防的・開発的な教育相談の実践

6年生のモデルクラスを中心に、予防的・開発的な教育相談を行い、その成果を学校全体に広める。

3 研究の見通し

(1) 不登校傾向の児童への支援

不登校傾向の児童に対し、教師が支援体制を工夫し、チームを組んで多面的な児童理解と支援のあり方を探るようにすれば、より望ましい支援の方向性を見出すことができるであろう。

(2) 予防的・開発的な教育相談〔自分の未来を考え、今を大切に生きるためのプログラム作り〕

6年生の児童に対して、道徳や学活の時間に、自己理解を深め、自分の未来に目標をもち、目標に向けて努力していく学習活動を工夫すれば、不登校を予防できるであろう。

Ⅲ 研究計画

1 課題解決の方法

(1) 不登校児童への直接的な支援

生徒指導委員会で話し合い、支援チームのメンバーを決める。教育相談係が中心となり、支援チーム会議を開き、児童の理解、援助方針、援助方

法、計画などを話し合う。その際、「チーム支援援助シート」を活用する。支援チームの有効性を検証し、評価する。

(2) 予防的・開発的な教育相談〔自分の未来を考え、今を大切に生きるためのプログラム作り〕

ア 夢や希望を考え、それに向けて努力する力の育成

主に、6年生の学級の児童を対象に、道徳や学級活動などの時間を使って、自分の将来への展望を考えながら、身近な目標に向かって努力することを考える学習を取り入れる。

近い未来（運動会まで、小学校卒業まで、中学校卒業までなど）と、遠い未来（10年後、20年後）といったスモールステップで目標を考え、それに向けて今、自分が何をしなければならないかを考えられるように支援する。そのように自分の希望や夢を考え、そのために今を大切に努力を重ねるという生きる構え（態度）を養いたい。

イ 自己理解・他者理解の大切さ

自分の将来を考えていく上で、自己理解を深めることは、大切である。なぜかという、自分は何をしたいと考えているのか、自分には、どんな心が働いているのか、といったことへの気付きは、自分の将来を考える上で、大切なことだからである。

自己理解を深めるだけでなく、友達や先生などの他者を理解することも大切である。他者を理解することで、自分の世界が広がり、他者との比較によって、自分自身の個性が何か分かってくるからである。

自己理解を深めたり、自分の将来を考えたり、又、お互いを理解し、認め合ったりする学習において、本研究では構成的グループエンカウンター（以下SGE）の手法を取り入れ、その有効な活用法を探る。

2 計画の流れ

(1) 不登校児童への支援

〔1学期〕不登校児童への支援体制作り

- ① 職員会議で「ほっとルーム」設置承認
- ② 生徒指導員会で「ほっとルーム」の基本方針と支援チームのシステムの確認
- ③ 支援チーム作り
- ④ 支援チーム会議

〔2学期〕不登校児童への支援の実施

- ① チーム支援開始

② 連携の見直しと強化

③ チーム支援の継続

④ チーム支援会議（支援の評価と見直し）

(2) 予防的・開発的な教育相談〔自分の未来を考え、今を大切に生きるためのプログラム作り〕

〔1学期〕

● 学級活動①「自己紹介をしよう」

● SGE①「たんていごっこ」

〔2学期〕

○ 学級活動②「運動会の目標を立てて、努力しよう」

○ 学級活動③「卒業するまでにこうなりたい」

● SGE②「自分がしたいことベスト10」

○ 学級活動④「自己理解を深めよう エゴグラム」

○ 学級活動⑤「自分の夢を考えよう」

● SGE③「私はわたし」

○●SGE④「これからの自分に大切なこと」

○・・・夢や希望を考え、それに向けて努力する力の育成

●・・・自己理解・他者理解

IV 研究の内容

1 不登校児童へのチーム支援

5月に職員会議で「ほっとルーム」の設置が承認された後、生徒指導委員会で、不登校傾向の児童へのチーム支援をどのように行うかを確認した。

(1) チーム支援の対象となる児童

チーム支援の対象となる児童は、毎月の欠席日数が6日以上を超える児童や、欠席日数が増加傾向にあったり、欠席日数が少なくても、人間関係のトラブルや家族のことで、不登校が心配される児童などを対象とすることにした。

今年度7月の生徒指導委員会で、欠席数の多い2名の児童をチーム支援の対象とすることとした。

(2) チーム支援のメンバー

支援チームは、生徒指導委員会がメンバーを決め、編成することにした。支援チームには、対象とする児童の担任、養護教諭、教育相談係は、必ず入ることとし、全職員を対象とし、職員と対象児童とのかかわりを配慮し、必要に応じて招集す

ることとした。

ア 事例1

(ア) 支援チームのメンバー

学校長、担任、理科専科、養護教諭、教育相談係

この中には、対象児童の成長を低学年の時から知っていて、その児童の情報をよくつかんでいる職員に入ってもらった。

(イ) 支援方針

○ 対象児童が委員会の仕事にやりがいを感じているところから、その当番が毎週木曜日ということもあって、毎週木曜日の朝、同じ方面から通う同級生の児童2名に、朝、対象児童の家に寄って、登校するように声をかけてもらう。

○ 担任も、木曜日に家庭訪問し、児童とのコミュニケーションをとる。

(ウ) 児童の様子

1学期、前の学年の時よりも登校数が増えたが、夏休みを境に、登校しなくなってしまった。代わりに、町の適応指導教室への通級が増えた。

そこで、2学期に入り、適応指導教室の指導員2人と担任、教育相談係で小支援会議を開き、情報交換と支援の方針を確認した。

イ 事例2

(ア) 支援チームのメンバー

学校長、担任、前担任、前々担任（音楽専科として対象児童の音楽の授業を受け持つ）、生徒指導主事、養護教諭、教育相談係の7名。

(イ) 支援方針

○ 保護者の子どもの身体的なことを心配する気持ちを受け止め、気持ちが和らぐように、話をゆったり聞くように努める。

○ 保護者が安心して相談できる場所や時間をできる限り確保する。

(ウ) 児童と保護者の様子

学校に来られると、授業中意欲的に学習に取り組み、友達関係も円滑である。保護者の態度も子どもを何とか継続して登校させたいという意欲が高まっているので、そうした気持ちをサポートしていくことが大切である。

(3) 成果

これまで不登校児童に対して、その対応のほとんどが担任一人で行ってきたのが、複数のメンバ

ーで対象児童についての話し合いをすることができた。

その成果の一つは、不登校傾向の児童とその家族への対応は、担任一人に大きな比重がかかり、精神的にも大きな負担になっていたのが、複数のメンバーで対応する体制が作られたことによって、多少なりともその負担を軽減できたことである。

二つ目は、複数のメンバーによって情報交換を行うことができ、ばらばらだった情報がまとめられ、援助方針を立てるのに役に立った。その際、活用した「チーム支援援助シート」は、その時点で、児童の情報をどの程度得られているかを掌握することができ、又、多角的な視点で児童を理解していくことにつながった。

2 予防的・開発的な教育相談〔自分の未来を考え、今を大切に生きるためのプログラム作り〕

(1) 夢や希望を考え、それに向かって努力する活動

ア 学級活動「卒業するまでにこうなりたい」

(ア) ねらい

小学校を卒業する時、どのような自分でありたいかを考えることで、近未来に向かって、目標をもって過ごすことの意識化を図る。

(イ) 児童の活動

「将来に夢をもつ」とは、どんなことか。児童の将来の夢に対するイメージを膨らませるため、世の中で大きな仕事をなし得た人のドキュメンタリーをビデオで視聴。

「心のノート」で、社会に貢献することの大切さ「三方よし（自分よし、相手よし、世間よし）」を確認する。

「新しく始まる中学校生活 いいスタートを切ろう」というワークシートで、中学校に入学するまでにどんなことを今のうちにやっておくといいか、確認する。

「卒業するまでにこうなりたい」というワークシートを配布。学習面と生活面で「こうなりたい自分」と「そのために努力すること」をじっくり考え、記入する。

(ウ) 考察

運動会を終えて、学年のちょうど中ばで、卒業までまだ間があり、ともすると目標を見失い、毎日を惰性ですごしてしまいがちなこの時期に、「中学校生活でいいスタートを切

ろう」と児童に投げかけたことは、「目標をもって生きる」ということを考えるきっかけとすることができた。「自分が小学校を卒業する時」という一つの節目になる時のことを考えるということは、今まで、そうした近未来のことを強く意識してこなかった児童にとって、「時間の流れの中で生きる」ということを知るきっかけにもなった。

オ 学級活動「自分の夢を考えよう」

(ア) ねらい

近い未来（小学校卒業、中学校生活）と遠い未来（20年後）の自分を想像し、自分の願望を意識化し、自分の近未来に向けて、今自分は何をしたらよいか考える。

(イ) 児童の活動

① ワークシートに「小学校を卒業するまでにこうなりたい」「中学校で実現したい夢（1～3年後）」「20年後の夢」の3つについて、考えたことを書く。そして、そのために、「今、やっておくこと」を考えて書く。もし、書けない所があっても、書ける時がきたら、その時自分でワークシートに書けるようにしておく。

② 「卒業までがんばろうと思うこと」を別のワークシートに書き、月に一度「自分が努力してきたこと」「自分のがんばり度」「自分へのアドバイス」を書いて、目標に向けての自分の努力を自己点検できるようにする。

(ウ) 考察

「小学校を卒業するまでにこうなりたい」の欄を書けた者は、100%（全員）、「中学校で実現したい夢（1～3年後）」まで書けた者は55%、「20年後の夢」まで書けた者は45%であった。

中学校（1～3年後）でも、思い描くことが難しいことがわかる。時間の流れの中で、今、自分は何をしたらよいか考えるきっかけになり、中学校以降の自分の願望を書けなかった児童も、そのことをはっきり意識できた。そのことも、自己理解につながっている。

(2) 自己理解、他者理解を進めていく活動

ア SGE「自分がしたいことベスト10」

(ア) ねらい

自分の願望を意識化し、さらに級友と表現

し合うことで自己理解と他者理解を深める。

(イ) 児童の活動

① 自分がしたいことを心に浮かんだ順に10個ワークシートに書く。

② 書いた10個を特にやりたい順にもう一枚の紙に書き直す。

③ 4人のグループを作り、やりたい順に書き直した自分がしたいことをグループの人に話す。

④ このエクササイズを通しての自分に対する気づきと友だちの話を聞いての気づきをワークシートに書く。

⑤ それぞれ書いたものを何人かが発表し、シェアリングする。

(ウ) 児童の振り返りから

◎ 自分への気づき

「よく考えてみるとしたいことがたくさんあった。」「したいことは思っていたよりも少なかった。」「どうしても東京ドームのマウンドに立ちたいから、これからも努力して夢を追いかけたいです。」

◎ 友達の話聞いて

「みんな夢をもっているんだなあと思った。」「みんないろいろな考えをもっていた。」「個性的だなあと思った。」

(エ) 考察

自分の願望を意識化することに有効であり、自分の願望が少ない児童にとっては、級友の願望を聞くことで、さらに、自分の願望を見直すことができた。

イ 学級活動「自己理解を深めよう エゴグラム」

(ア) ねらい

エゴグラムを作成し、現在の自分の感情や行動の傾向を見つめ、自己理解を深める。

(イ) 児童の活動の様子

① エゴグラムの概略を知る。

② 自分のエゴグラムを作成する。

③ 自分のエゴグラムを分析する。

④ エゴグラムから見た「今の自分」について、気付いたこと、思ったことを書く。

⑤ 学習の振り返り

(ウ) 児童の振り返りから

「考えたこともなかったことを知り、勉強になった。少し、自己理解ができた。プラス

面とマイナス面が両方分かり、よかった。」
「初めてやって、自分の心がよく分かってよかった。また、ちょっと大人になったらやってみたいと思いました。」

(エ) 考察

子どもなのに、「親心」や「おとな心」がだれにもあるという交流分析の概念を知ること自体が、児童にとって意外なことだったようだ。

自分のエゴグラムを作った後、高い項目のマイナス面とプラス面、そして、マイナス面へのアドバイスを資料として配ったため、自分のエゴグラムパターンを素直に受けとめている様子がワークシートに書かれていた。

カ SGE「私はわたし」

(ア) ねらい

自分の個性に気付き、友達の個性についても尊重する態度を育てる。

(イ) 児童の活動の様子

- ① クラスの仲間と自分はどんな所が違うか、ほかの人にはない自分自身の個性や経験などを考えて3つ書く。
- ② 教師が読み上げ、だれのことか予想してワークシートに名前を記入する。
- ③ 当たっていたかどうか丸つけをする。
- ④ エクササイズの振り返りをする。

(ウ) 児童の振り返りから

「みんないろいろな体験や知らないことをしているんだなあと思いました。」「身近にいる友だちだけど、知らないことがたくさんあるんだなあと思いました。」「最初は、自分のオリジナルってないなあと思った。でも、自分のちょっとしたオリジナルを知ってもらうのは楽しかったし、『こんなことでみんなおどろくんだな』と少しびっくりした。みんなのオリジナルを聞くのも楽しかった。」

(エ) 考察

最初は、人と違う自分の個性を見つけるのに苦労している様子が見られたが、ちょっとした自分の個性に気付いたり、普段生活を共にしているクラスの仲間の意外なことを知ったりできて、楽しみながら、自己理解と他者理解をすることができていた。

V まとめと今後の課題

1 不登校の児童へのチーム支援

これまで担任一人に多くの比重がかけられていた不登校児童への対応が、チーム支援をすることによって、多少なりとも軽減することができた。断片的だった情報を統合したり、児童を多面的に理解し、対応策を考えたりすることができた。

また、支援チームを固定せず、児童の実態に応じて、弾力的にメンバーを変えられる柔軟さが、チーム支援を進めていく上で、大切であると感じた。本研究の中では、適応指導教室との連携は、非常に有効であった。なぜなら、対象児童の、適応指導教室での学校や家庭訪問では見られない様子を知ることができたり、児童を理解するにあたって大切な情報を入手したりできたからである。

しかし、医療機関との連携は、個人情報保護の立場から難しく、課題である。

様々な仕事を抱える学校現場で、チーム会議をもつ時間を生み出すことは、困難を極めた。仕事を精選し、児童と向かい合う時間を多く確保できるようにしていくことが今後の課題である。

2 予防的・開発的な教育相談〔自分の未来を考え、今を大切に生きるためのプログラム作り〕

半年先、1年以上先の自分の未来を考える活動を取り入れたことは、人生を時間の流れの中でとらえ、自分は何をしたいのか、何ができるのかを考えるきっかけとすることができた。

自分の将来を考える作業は、自分だけと向かい合う、孤独な作業だが、こうした活動を通して、今を大切に作る気持ちが育まれていく。

こうした孤独な作業だけでなく、SGEを取り入れたことで、他者とのつながり、つまり、連帯感を感じながら、自己理解や他者理解をすることができた。こうした活動は、不登校の予防に有効であると感じた。

目標として考えたものも、これから何度も修正していかななくてはならない時がくるであろう。その時、どのような支援ができるか、さらに研究を深めていきたい。

〈主な参考文献〉

- ・國分 康孝監修『エンカウンターで学級が変わる小学校編』 図書文化(1996)

(担当指導主事 井上 淑人)